

プロセス志向の「厚い比較」

尾中文哉(日本女子大学)

1. 目的

日本の社会学における比較の方法は、1950年代から1980年代にかけての長い流行を経て、1990年代から2000年代にかけては否定的な時期が続いてきた。しかし現在、再び「比較」に関心が集まっているとも考えられるが、それはどのような規準を持つべきであろうか。本報告の目的は、それについての一定の見解を示すことである。

2. 方法

方法は、戦後の研究の変遷を紹介するなかで示唆を得ようとするものである。

3. 結果

1950年代から1960年代にかけては、「日本人の国民性」調査や「社会階層と社会移動」全国調査が示すように、計量的な方法を使い、かつ国際比較への志向をもった研究が一般的であった。こうした研究は、T.パーソンズ、S.N.アイゼンシュタット、R.ベラーなどの研究とも関係していたとみることできる。

しかし1970年代以降になるとこうした計量的手法への批判が盛んになり、質的な手法による研究が唱導されるようになる。そこではM.ウェーバーの再評価やA.シュッツ、H.ガーフィンケルなどの導入が行われただけでなく、C.レヴィ=ストロース、C.ギアツなど人類学者の参照も行われた。ここでは単にカテゴリカルなデータの利用というだけではなく、インタビューや会話の分析、参与観察、テキストの分析など質的な手法が広く利用されるようになった。

1990年代になるとP.アリエスやM.フーコーが導入されるなかで、以上のような比較中心的な研究の流れが強く批判されるようになり、歴史中心的な研究の方針が打ち出された。そこでは計量的な手法も活用されたが、その前の時代の質的な手法を重視する傾向があった。N.エリアスも、見かけ上はこの流れの中で、プロセスやネットワークなどの概念も伴いつつ導入された。

この流れは現在も続いているわけだが、こうした方向性が、もっぱら日本中心的、外国一国研究中心的になる傾向に対し、特に2010年代になって、計量的研究においても、質的な研究においても批判が強まり、それとは異なる研究が発表されるようになってきている。

こうした推移を踏まえると、現在における比較研究がふまえないといけないいくつかの条件があると考えられる。それは、(1)質的な手法と計量的な手法の双方に目配りしたものである必要があること、(2)歴史という観点を適切に取り入れる必要があること、である。

これらに対しては、(1)については、人や地域を限定して質的・量的データを綿密に集めて比較を行う「厚い比較」という方法を提案することができるし、(2)に関しては、(1)に加え時系列データも活用し一貫した過程も明らかにしようとするプロセス志向的方法論を参照することができる。

4. 結論

以上のような流れを踏まえると、(1)人や地域を限定することによる計量的な手法と質的な手法の連携、(2)歴史的な観点の適切な取り入れ、少なくともこの二点は落とせない規準であると考えられ、それを満たすもののひとつとして、プロセス志向的な「厚い比較」という方法論を提示できる。

文献

Baur, Nina, and Stefanie Ernst. 2011. "Towards a process-oriented methodology: modern social science research methods and Norbert Elias's figurational sociology." *The Sociological Review* 11:117-139. Oxford: Wiley-Blackwell.

尾中文哉 2015 『「進学」の比較社会学—三つのタイ農村における「地域文化」との係わりで—』ハーベスト社。